

優秀賞

中学生部門

福岡教育大学附属久留米中学校3年

松藤 萌

“心”があれば

ユニバーサルデザインが増えてきている今、障害者やお年寄りとは話する機会が減ってきているように感じる。困っていないなら、声をかけなくても良い。そんなわけではない。

私は生まれた時から今まで、一度も兄と言葉を交わしたことがない。兄は、二歳半の時に障害者になり、体の自由と共に言葉も失った。母や父が家にいないときは、私が面倒を見たりすることもあった。面倒を見てみると、兄はたまに怒り出すことがある。怒り出しても、言葉で繋がることができなかったので、何に怒っているのか分からず、何をすれば良いのかも分からなかった。しかし、兄の感情は、私の行動の悪かった点を考えさせるきっかけになった。その回数を重ねるごとに兄のことも少しずつ分かっていった。兄のことが分かっていると、笑顔でいることも増えていった。兄が笑顔になることが多かったのは、音楽を聞いている時だ。音楽を聞く、兄が笑顔になる、家族の中に温かい雰囲気生まれる。兄の存在は私の家族の中で、とても大きなものであった。しかしそんな兄もこの四月から柳川にある施設に入所することになった。兄のいない生活はどこか寂しい。だからこそ、お盆に兄が帰ってくると聞いたときは、とても嬉しかった。兄の帰ってきたたった二日だけ、また家族に笑顔が戻ったのである。私達家族のこの笑顔は、永遠不滅である。

心の叫びが感情となり、表に表れる。私達健常者は、障害者の感情に気づかなければならない。ユニバーサルデザインなんかより、ずっとずっと心を見ることが大切だと思う。言葉でなければ、伝わらないこともある。しかし、言葉には心が必要だ。この心があれば、言葉がなくなっても、繋がれる。伝わる。今、東京オリンピックに向けて英語の授業が強化されているように感じる。しかし、たとえ英語が話せないとしても大丈夫だと思う。心を込めて接すること、これが人と繋がる第一歩なのだから。